

宇野弘蔵の資金論(3)

著者	今東 博文
著者別名	Imahigashi Hirohumi
雑誌名	経済論集
巻	21
号	1
ページ	23-33
発行年	1995-10
URL	http://id.nii.ac.jp/1060/00005434/

宇野弘蔵の資金論(3)

今 東 博 文

はじめに

I. 商品流通世界と資金

1. 貨幣諸機能と商品流通世界 (本誌、第17巻2号)
2. 「貨幣」としての貨幣と資金 (本誌、第19巻1号)
3. 資本と資金 (本号)

II. 資金の本質規定

III. 貨幣市場と資金

I. 商品流通世界と資金 (承前)

3. 資本と資金

[1] 宇野弘蔵は、『価値論』¹⁾の末尾において、価値の実体、形態、本質の3層の関係について、「私は、……形態規定の発展を媒介にして『価値の実体』を『価値の本質』において把握しようと試みてきた」(232ページ)と述べている。ここで「形態規定の発展」とは、商品流通世界の無政府的性格、生産の社会的均衡編成関係からの外的性格そのものの規定性の流通形態としての展開のことにほかならず、宇野の原理論体系における「流通論」は、「実体をいれうるもの」(『五十年』下、787ページ)、「価値法則による訂正を入れうる形態規定」(『研究』I、274ページ)、「基準を与えるような形態」(同、279ページ)として商品、貨幣、資本を展開しているのである。したがって、宇野にとって、価値の実体は「あらゆる社会に共通なる社会的労働共同体」(『新原論』、90ページ)における経済の原則が商品経済的に特殊の様式において充足されるという「価値の本質」を明らかにすることによってはじめて捉えられることになるのである。

1) 宇野弘蔵『価値論』(河出書房、1947年)、青木書店、1965年。以下、『価値論』と略記。

こうして、純粋な「商品経済形態」（『語る』²⁾、79ページ）としての商品、貨幣、資本は、均衡的に編成された社会的な労働生産過程の規定性から疎遠な「純経済的な過程」（『効用』³⁾、175ページ）を通して措定されることになるのであるが、「純経済的な過程」が「イデオロギーによる純化」ではなく「商品経済による資本主義の純化」（同、141ページ）を根拠として抽象されるべきものとすれば、流通論の展開の動力は、商品経済的な自己利益の最大化を基準とする経済主体の行動によって与えられるほかないであろう。「純粋の資本主義社会でもその法則が……経済生活の主体の行動をとおして現われる」（『語る』、145ページ）のである。

また、商品所有者の想定の一必要性について、

「商品は、所有者非所有者の関係を超越して動くものではない。科学的に分析する場合にも、この動きに従ってこれを分析するほかない」（『価値論』、134ページ）。

貨幣の価値尺度機能について、

「測定自身を対象がやっているわけです。もちろんこの対象というのは人間の行動なのです」（『学ぶ』⁴⁾、156ページ）。

上のように述べて、流通論の論理の展開の客観性は、経済主体の個別的、主観的な自己利益の追求行動の確かさに支えられていることを明らかにしている⁵⁾。

かくして、人間の商品経済的意識と行動にもとづいて展開される「流通論では物神そのものを規定していることになる」（『五十年』下、710ページ）。商品経済的な物神的意識に支配された人間行動によって形成される諸関係の展開が、流通論を構成する⁶⁾。「純粋な資本主義社会を構成する経済主体のこの商品経済的な意識とそれにもとづく行動が形成する物的関係の形態こそが、宇野が形態と呼んだものだったのである⁷⁾」。

〔2〕 われわれはすでに、貨幣の第3の機能としての資金機能を「流通から外部に引き上げされる方向性において捉えられた貨幣の機能、流通からの拘束を解除された貨幣の機能」と規定した⁸⁾。このような貨幣は独立化された価値の定在である。資金としての貨幣は、流通部面にある貨幣と対

2) 宇野弘蔵『経済学を語る』東京大学出版会、1967年。以下、『語る』と略記。

3) 宇野弘蔵『経済学の効用』東京大学出版会、1972年。以下、『効用』と略記。

4) 宇野弘蔵『資本論に学ぶ』東京大学出版会、1975年。以下、『学ぶ』と略記。

5) 宇野は、経済学の原理論は、その論理の展開が対象を模写するだけではなく、論理展開の方法をも模写するところにその客観性が保証されるとしている（例えば、『経済学方法論』東京大学出版会、1962年（以下、『方』と略記）、164-165ページ、『効用』、180、181ページ、『語る』、71、142ページ、等を参照されたい）。山口重克によれば、宇野の「方法の模写」説には、資本主義の歴史的純化傾向が純粋資本主義の想定の一客観性を与えるという面と、原理論の展開方法自身の客観性が経済主体の行動によって与えられるとされる面の2面が存在している。流通論の展開にあたってはとくに、後者の面が宣揚されるべきである（山口重克「いわゆる方法の模写について」、『価値論の射程』東京大学出版会、1987年、を参照されたい）。

6) 宇野は、経済学の原理論の流通論、生産論、分配論を、それぞれ私法、刑法、公法の法律の分類に譬えているが（『語る』、155ページ）、そのことからすれば、流通論の経済主体は商品経済の物神性にとらわれた近代合理主義的個人＝経済人として捉えられているといえよう。

7) 前掲、山口「いわゆる方法の模写について」、49ページ。

8) 本稿(2)、25ページ。

立するものとして現われる。

「商品における価値と使用価値との二面が、先には流通部面における商品と貨幣との対立に外化したのであるが、ここではさらに流通部面の内と外とに対立した形であたえられる」(『価値論』, 177～178ページ)。

このように流通から自立化した資金としての貨幣は、個別経済主体の行動を通してどのような諸関係を展開するのであろうか。ここでは、経済主体の行動の論理にもとづいて資金としての貨幣が、流通形態としての資本にどのように展開されるのか、検討しよう。

「商品は所有者にとって商品である」(『価値論』, 134ページ)のと同様に、資金としての貨幣はまず貨幣所有者にとって「自由に処分し得る貨幣」(『旧原論』, 71ページ)、「自由に使用しうる資金」(『新原論』, 95ページ)であり、この資金の自由処分の可能性は、いうまでもなく、資金としての貨幣が、商品の売買から解放されていることによるのであるが、問題は、資金としての貨幣が如何に「一般的富を増殖する富」、「価値の運動体としての富」(『旧原論』, 71ページ)としての資本に展開されるのかにある⁹⁾。

[3] 宇野は「自由に使える貨幣の余裕ができれば貨幣は資本になる」(『効用』, 91ページ)とし、「資本ではなくてしかも資本に転化する貨幣」(『五十年』下, 801ページ)を資金と規定しているのであるが、資金としての貨幣が「価値増殖をなし乍ら無限に同じ過程を繰り返すものとして資本となる」(『新原論』, 39ページ)論理が十分に解明されていない点に問題が残されているように思われる。大内力がいうように、「資金という概念にはすでに資本たることが含まれている¹⁰⁾」と考えられるとしても、資金の資本への転化の論理が、経済主体の行動の論理に即して示されなければならないのである。

流通の外部にある貨幣は、貨幣所有者にとって、流通界に出勤して購買機能を果たすかぎりで貨幣である。宇野は、貨幣としての貨幣が「流過程への復帰の方向をとっている場合」(『研究』, 184ページ)を資金とし、われわれの付随的休止貨幣について「貨幣は流通外においても貨幣である」(『価値論』, 177ページ)というのであるが、資金が資本として「流過程への復帰の方向をとっている場合」の内容についてはさらなる検討が必要であらう。

資金としての貨幣が流通の外部で一般的抽象的富、価値の独立体として存在するためには、価値の独立体として自己確証がなされなければならない。まったく流通から疎隔されたものとしては、

9) 周知のように、『資本論』第1巻第4章「貨幣の資本への転化」において、マルクスは、 $W-G-W$ と $G-W-G$ の2つの循環を対比して、後者は $G-W-G$ でなければ無内容な運動であるということから、 $G-W-G$ という資本の一般的定式を導いている。そこでは、 $G-W-G$ の資本定式は、経済主体の商品経済的行動にもとづいて貨幣の資本への論理的な発生が説かれているのではなく、流通世界の経済主体の眼前にすでに存在する $G-W-G$ 、 $G-W-G$ の諸特質が記述されるという方法によることになっているものと思われる。われわれは、すでに述べたように、資金としての貨幣の所有者の行動の論理を追求することによって「貨幣の資本への転化」を説かなければならない。

10) 大内力『大内力経済学大系 第二巻 経済原論 上』東京大学出版会、1981年、194ページ。

貨幣は単に使用価値としての金であるにすぎない。金も商品たる必要条件として特殊の有用性を有することはいうまでもないが、金の特殊の有用性自体が蓄蔵の対象とされるわけではない。金が流通界において他の商品に対して一般的な交換力を有するからこそ流通から引き上げられて蓄蔵の対象ともなるのである。流通から引き上げられて流通との関係を完全に断絶されてしまえば、貨幣は、したがって、単なる使用価値としての金である。それが、一般的富として蓄蔵されるためには、自己の交換力としての価値が流通において確証されなければならない。価値とは流通における交換性のことであるから¹¹⁾、それが確証されるためには、流通に出動して他商品との交換が実現されるのでなければならない。貨幣金が一般的な価値の体化物であるとしても、その交換力としての価値は変動を免れるわけではないし、価値の大きさの計量は流通の外部では行なわれえない。

「重さや化学成分と異って、商品の価値にはその所有者があるわけです。それは、個人的要求なり、或いは已に従来の値段関係による評価があり乍ら、而もそれは交換を通してでないと実際にはわからないという関係にある」（『資本論研究』¹²⁾、237ページ）。

商品流通世界における「商品経済に特有な価格変動」（『効用』、91ページ）に対処することなくしては、使用価値としての金の保蔵は可能であるにしても、一般的富としての貨幣の保蔵は不可能であるといわなければならない。

一般的富としての貨幣は商品流通を離れて存在することはできない。したがって、貨幣としての貨幣が一般的な交換力として流通外において存在する仕方は、流通に対して出動と回帰とを繰り返す循環運動として以外にはありえないのである。貨幣所有者の貨幣に対する欲望は無限であるから、流通へ出動して回収された貨幣は当初の価値の大きさを増大させていなければならない。貨幣の価値とは流通世界に存在する商品に対する交換力のことであるから、一般的なデフレーションのような場合には、むしろ流通へ出動を積極的に控えることが価値の増殖手段ともなるのであるが、貨幣所有者は流通の外部に価値を保蔵する手段として、流通を媒介とする価値の増殖運動を展開することになる。資本とは、貨幣所有者による価値の保蔵行動によって形成される、価値の姿態変換の循環運動体として捉えることができる。

マルクスは、価値の存在が流通へ出動を不可欠の条件とすることについて次のように述べている。

「貨幣の自立は仮象にすぎない。つまり、流通からの貨幣の独立性は、ただ流通を顧慮してのみ、流通への依存としてのみ存立する」（*Gr.*, S.145, 訳 I, 153ページ）¹³⁾。

11) 価値の概念については、本稿(2)、注2)を参照されたい。

12) 宇野弘蔵・向坂逸郎編『資本論研究』至誠堂、1958年。以下、『資本論研究』と略記。

13) Karl Marx, *Grundrisse der Kritik der politischen Ökonomie (Rohentwurf)*, 1857-1858, Dietz Verlag, 1953, S.145, 訳, 高木幸二郎監訳『経済学批判要綱』I, 大月書店、1958年、153ページ。以下、〔*Gr.*, S.145, 訳 I, 153ページ〕と略記。

「貨幣が流通に入ることはそれ自体貨幣が貨幣としてあるための一契機でなければならず、貨幣が貨幣としてあることは流通に入っていくことでなければならない。そのことはすなわち、実現された交換価値としては、貨幣は同時に交換価値が実現されていく過程として措定されていなければならない」(Gr., S.145-146, 訳I, 153ページ)。

したがって、資本は貨幣所有者にとっては、まず資金としての貨幣の保蔵行動として現われる。宇野には、資本の商人資本的形式 $G-W-G'$ を「資産の一般的規定」(『資本論研究』, 479ページ)と述べているところがあるが、それは資本形式 $G-W-G'$ が貨幣資産としての資金の保蔵行動の形態として捉えられていることによると考えてよいように思われる。商品経済的富の保蔵者として貨幣所有者は資本家となる。

資金としての貨幣を商品経済的な富として流通外に保蔵するためには、逆説的ではあるが、貨幣は流通を媒介として自己に還帰する運動を経過しなければならない。貨幣は、商品経済社会においては流通の内部においてのみ交換力としての価値だからである。資金としての貨幣の所有者による価値の増殖行動は、いわば価値の確保のための迂路であるということになる。価値の確保のためには価値の増殖行動を不可欠とするところから、資本家としての貨幣所有者にとっては価値の増殖は自己目的化することになる。われわれは、ここに「商品経済の中に当然に資金が資本化する契機」(『研究』I, 318ページ)を求めることができるのである。

〔4〕 かくして、われわれは、貨幣所有者の行動にもとづいて流通を経由する貨幣の往還運動を資本の諸形式として類別することができる。宇野の、商人資本的形式、金貸資本的形式、産業資本的形式の展開は、概ね次のようである¹⁴⁾。

$G-W-G'$ は、「商品を安く買って高く売るということにその価値増殖の根拠を有するもの」であり、商品流通世界の価格の相違、価格の変動を利用するにしても、商品の売り手ないし買い手の無知、窮状につけ込むことによるにしても、いずれも価値増殖の根拠は商人の資本家的活動によるのであって、「資本自身がその価値を増殖するものとはいえない」し、「社会的に一般的根拠を有するものではない」。

「資本に対する資本」としての $G\cdots G'$ は、「商人に資金を貸付けてその利潤の一部分を利子として得ることになるのであるが、それはもはや本来の流通過程において剰余価値を得るものではない」。また、この形式においては $G-W-G'$ とは異なり、価値の増殖は資本家的活動にもとづくものではなく、「資本価値の自己増殖の一面を示すもの」であり、そのことは「商人資本の利潤率の不確定なのに対して、利子率の確定性をなすのであるが、しかしそれと同時に価値増殖の根拠を自分自身には全然もたないことを明らかにする」。

14) 本稿の叙述ではできるかぎり宇野弘蔵の所説に内在した検討がなされることになるので、筆者の資本形式論の展開自体の積極的提示については、前掲、拙稿「生産の資本形式」を参照されたい。

G—W…P…W'—G'の形式は、「G—Wの過程で購入した商品をそのまま売のではなく、この商品によって新しくより多くの価値を有する商品を生産し、その商品をW—Gの過程で販売して剰余価値をうる」ことによって「自らの基礎を確立する」のである。「この形式のいわば基軸をなす労働力の商品化は流通形態自身から出るものではないから」、「産業資本の形式では、……資本はもはや単なる流通形態ではない」ことになる（以上の引用は、『新原論』、41～45ページ）。

〔5〕 個々の論点ごとに検討しよう。

第1に、資本の諸形式の展開の動力としての資本家の活動について。宇野は、金貨資本的形式においては、商人資本的形式に比して資本家の活動が消極化し、そのことは資本価値の「自己増殖の一面を示す」ものという。しかし、資本形態は、資金としての貨幣所有者の価値の保蔵活動の類型を示すものであって、むしろ、資本家の活動そのものの類別だといってよいのであって、金貨資本的形式において「資本家としての何等かの活動によってその価値増殖をなすというものではない」（同、41ページ）とはいえない。G—W—G'では、資本家の判断にもとづいて、安く買えて高く売れる商品、高くしか買えないがより高く売れる商品、安くしか売れないがより安く買える商品、が選択されて、その商品の売買価格差が利潤となるわけである。なお、安く買えて高く売れる商品の選択は、安い時に買えて高い時に売れる商品の選択ともいいうるのであるから、購買時点と販売時点の選択という要素も含まれるとしなければならないのである。このような売買商品と売買時点の選択が資本家の活動の中心であるが、それに伴う市況の調査、商品の保管、運輸、等の諸活動も行なわれなければならないし、そのためには商品の買入れに要する貨幣の他に追加的な貨幣がそれらの諸活動のための費用支出として必要とされることになるであろう（これらのいわゆる流通費用については、次章「資金の本質規定」において検討されるであろう）。

金貨資本的形式にあっても、資本家の活動が消極化するわけではない。借り手の選択、金額と貸付期間と利率の決定が活動の中心であろう。さらに、借り手の信用調査等の債権の保全にかかわる諸活動とそれに伴う諸費用が必要となるであろう。

宇野のいう利潤率の不確定性に対する利率の確定性については、次のような諸点が注意されるべきであろう。(1)利率についても、商品価格と同様に、時間的な変動と空間的な相違が存在すること。したがって、貸付期間と借り手の商品経済的な信用度とに応じて利率は相違するし、貸付期間と貸付時点に応じて利率は変動する。利率の確定性というのは、利率が変動もしないし相違もしないということではないのである。(2)貸し付けという資金としての貨幣の保蔵の様式において、貸し付けの時点で利率が決定され、貸し付けられた貨幣の回収時点で確実にその利率による利子が実現されるということを利率の確定性という場合には、借り手の借入期間中における増殖行動の成否に応じて、回収が不能になったり、一部しか回収できなかったり、回収が遅延すること等がありうるということが考慮されないことになる。利率の確定性とは、一定の貸借期間中

は、原則として当初の利子率が変更されないという貸借契約の内容に関わることであって、一定の利子率による利子の実現の確実性ということではない。したがって、貸し手にとっては、利子率の確定性はこの形式の価値増殖率の確実性を意味するわけではないのである。このように考えられるとすれば、この形式が「資本価値の自己増殖の一面を示すもの」とはいえないように思われるのである。

また、産業資本的形式でも、生産する商品種の選択と生産量の決定および生産方法の決定が活動の中心であるが、その他に商人資本的形式に必要とされた諸活動とそれに伴う諸費用が必要とされるであろう。

〔6〕 第2に、価値増殖の形態論的根拠としての商品の価格差について。宇野は、商人資本的形式について、それが「場所的な、あるいは時間的な価格の相違を利用する」(『新原論』, 41ページ)、「資本としては時と場所との価格の相違を利用する」(『五十年』下, 800ページ, また, 同, 803ページ, を参照)、「時間的に現在の流通市場と将来の流通市場とを結ぶもの」(『研究』I, 319ページ)としている。第3の引用を、商品の購買価格と販売価格とを資本家の価値増殖行動を通して価値の運動体として連結するものと解することができるとすれば、これらはいずれも、商品の空間的、時間的価格差が商人資本的形式の利潤の源泉であることを述べたものであると見てよい。価格の不断の時間的変動と不均質な空間的相違を流通世界の本来の属性であるとみなすことができるのであれば、このような商品の価格差の利用は、資本家にとってもっとも基礎的な価値増殖手段であるというよいのである。

ところで、宇野は、このような価格差を利用する増殖様式をとる商人資本的形式について、「安く売る者と高く買う者との間に入って、いわば社会と社会との間に割込むことによって利潤をあげるのであって、その価値増殖は社会的に一般的根拠を有するものではない」(『新原論』, 41ページ)という。歴史的な商人資本であれば、「社会と社会との間に割込むことによって利潤をあげる」こともあれば、収奪的手段によることもあるものとしてよいであろうが、不断に存在する広範な価格差を特質とする流通世界における、交換力としての価値の増殖様式として資本の諸形式を論ずる場合、価格差を利用する増殖様式の成立は普遍的根拠を有するものというよいのではないと思われる。宇野は、産業資本におけるいわば実体的な価値増殖に対比して、「その価値増殖は社会的に一般的な根拠を有するものではない」と述べているのであるが、流通世界における価格差の利用は産業資本的形式¹⁵⁾にも共通するのである。

15) 産業資本と産業資本的形式は明確に区別されなければならない。前者は、資本主義社会における生産の社会的均衡編成の主体としての資本であり、後者は、資本主義的商品経済社会を含む商品経済一般に共通する資本の一特殊増殖様式を示す。いうまでもなく、産業資本の価値増殖は産業資本的形式によるのである。山口は、後者を「商品生産資本の形式」とし両者を峻別している(前掲, 山口『経済原論講義』, 63ページ)。宇野が、「産業資本の形式では、それ自身が示すように、資本はもはや単なる流通形態ではない」というのは、この区別を曖昧にするのではないと思われる。

産業資本的形式は、宇野のいうように、「有らゆる社会の生産過程に共通なる、いわば社会的実体として社会の基礎をなすものとしての生産過程を把握することによって、商品経済をして歴史的に一社会を形成せしめることになる」（『新原論』、45ページ）のであり、産業資本的形式は産業資本にいわば転成するのであるが、産業資本とは異なって、労働力の商品化の全面化と社会的な生産編成の資本による全面的実現を前提するものではない。流通から引き上げられた一般的富としての貨幣の増殖の1つの特殊の様式を明らかにするものである。 $G-W \cdots P \cdots W'-G'$ で示される産業資本的形式において、商品の生産過程は、流通における価値の循環運動の一時的中断である。そこでの生産は、したがって、流通外における資本家的活動の過程であり、労働力をも商品として購入する資本主義的生産であっても、奴隷労働によるものであっても、小生産者のような資本家の自己労働に主としてとづくものであっても、この形式は成立しうる（したがって、この形式は $G-W <_{A}^{Pm} P \cdots W'-G'$ と表記されるべきではない）。すなわち、この形式では、生産費用よりも高く売れる商品を生産するために、商品の販売価格よりも安い原材料等を購入しているのであって、いわば流通世界に存在する異種商品間の価格差¹⁶⁾を利用する形式であるといえることができるのである。

流通における売買価格差の利用は、流通を経由することによる価値の保蔵、増殖の直接的手段であって、商人資本的形式と産業資本的形式に共通する価値増殖のための第一次的な資本家活動であるといえる。産業資本的形式では、商品の購買と商品の販売とが流通外における資本家的活動の過程による中断に媒介されて結合されているわけである。

〔7〕 宇野は、商人資本的形式のリスク負担の側面について、次のように述べている。

「 $G-W-G'$ の形式は……まず最初に容易に開始しうる $G-W$ をもって出発し、第二段の $W-G$ で単純なる流通のいわゆる命懸けの飛躍を意味する第一段を引受けるのであって、いわゆる危険を負担するものとして当然に商品の売買価格の差額を利益として獲得すべきものとせられる」（『旧原論』、73ページ）。

商品流通世界において、商品は、その価値を絶えず変動しつつ、同種商品の間においてもその価値の相違を残しつつ存在している。 $W-G-W'$ において、 W の価値を W' が購入できるだけの貨幣量に実現できるか否かは、商品所有者の W の販売のための活動にかかっているといってよいのである。 $W-G$ の過程には、つねに、販売できないか、予想された価格よりも低い価格でしか販売されないという危険が伴うわけであって、まったく売れない場合には、商品は流通外に引き上げられてやむをえず廃棄されるか、自己消費されるということにもならざるをえない。商品は流通外においてはもはや商品ではなく、したがって価値物でもなくなるのである。商人資本的形式においては、商品所有者の販売過程を $G-W-G'$ の $W-G'$ の過程において引き受け、「危険を負担する」ことにな

16) 青才高志『利潤論の展開——概念と機構——』時潮社、1990年、12ページ、を参照。

る。しかし、ここで $W-G-W'$ の $W-G$ と $G-W-G'$ の $G-W$ の実現価格は必ずしも、商人による「掠奪的取引」(同上)におけるような買い叩きによって成立する価格ではない。商品価値は、経済主体によって個別的に評価された交換力としてあるのであって、その実現価格は売り手(商品所有者)にとって十分に高い価格であるとともに同時に買い手にとっては十分に安い価格であるといつてよいのである。

流通の内部にある商品は、不断に価格変動にさらされているのみではなく、同種商品の価格は空間的にある価格帯の間に分布していると考えられるのであるから、商品価値の貨幣への実現は、資本家にとっても、取得価格から減価する危険をつねに孕んでいるといふことができる。商人資本的形式においても、産業資本的形式においても、資本家は自らの流通の内部における活動を通してこの危険を回避すべくつとめているのである。流通において価値が商品の形態にあれば、このようないわば流通の危険に直面することを避けられないのであり、資金の保蔵、増殖の活動の類型としての資本の諸形式は、流通の危険の回避行動の類型ともいふことができるのである。 $G\cdots\cdots G'$ の形式は、 $G-W-G'$ 、 $G-W\cdots P\cdots W'-G'$ に寄生する「資本に対する資本」であつて、いわば寄生する個別の資本運動の選択が同時に危険の回避行動ともなるのである¹⁷⁾。先にも述べたように、「利子率の確定性」は $G\cdots\cdots G'$ 形式の増殖率の確定性を意味するものではないのである。資本の諸形式は、かくして、流通の危険の回避行動を内包するものとして捉えることができる。

資本の価値増殖行動が流通の危険の回避行動でもあるということから、資本家は商品が流通にある時間、いいかえれば資本価値が商品形態にある時間をできるかぎり短縮しようとする。商品が流通にある時間が長くなれば、先に述べたように、流通の危険に晒される時間が長くなり、資本家はそれに伴う諸活動と諸費用を追加しなければならないからである。「資本の運動は、縦に時間的に展開される」(『研究』I, 316ページ)のであつて、流通期間の長期化は回転期間の長期化を介して資本の価値増殖の効率を低下させることになるのである。個別資本家的には、時間の経過自体が費用化されるといふことができるのであつて、流通にある時間の短縮は資本家的活動の規定的動機である(『新原論』, 155ページ, を参照せよ)。

〔8〕 第3に、資本諸形式の展開序次について。宇野弘蔵は、資本諸形式を、商人資本的形式、金貸資本的形式、産業資本的形式の順に展開していたのであるが、展開序次を決定する指標は、価値の増殖の様式が、流通における価格差や資本家の個別的活動にもとづくものから社会的根拠を有するものへと展開されるものとして、価値の増殖の確実性と自立性が漸次的に増大することに求められているように思われる。しかし、どの資本形式にあつても、資本が流通における価値の確証と増殖のための運動体であることを考えれば、それはまさに流通の不確定性と不均質性とを体現する

17) 宇野が、 $G\cdots\cdots G'$ の形式では資本家的活動の面は現われないものとしているのは疑問である(『研究』I, 328ページ, 『新原論』, 41ページ, 等を参照)。

ということができるのであって、そのようなものとして資本は流通形態のなのであるから、価値の増殖の確実性と自立性の拡大を展開序次の指標とすることはできないのではないだろうか。したがって、宇野のように、産業資本的形式(宇野の場合には産業資本そのものについて述べているようにも解することができるのであるが)が資本の諸形式の最後に展開されることを、「 $G-W-G'$ のごとく不等価交換によることもなく、また $G\cdots G'$ のごとくにその背後に剰余価値の出所を求めることもなく、資本はその価値を増殖し得る」(『旧原論』, 82ページ) ことになるからであると説明することはできないように思われるのである。

宇野は、資本の3形式相互の関係について次のように述べている。

「 $G-W-G'$, $G\cdots G'$ を単に〔原始的蓄積の過程を考慮に入れなければ——引用者〕貨幣の資本への転化の段階として把握するとき、それは必然的に第三の形式を展開するものとして理解することができる。いい換えれば第三の形式($G-W\cdots P\cdots W'-G'$)は、第一、第二の形式を含みつつ、貨幣の資本への転化を完成することになる。第一、第二の形式は、その抽象的一面にすぎない」(『旧原論』, 78ページ)。

「形式的には $G-W-G'$ と $G\cdots G'$ が統合されて産業資本形式に展開しうる」(『研究』I, 317ページ)。

宇野にあっては、産業資本的形式が他の2形式から大区分され、「商品経済を全社会的に確立するもの」(『旧原論』, 79ページ)と規定されている。産業資本的形式は、前2形式における、商品売買による価格差の実現の過程と、資本家の活動の過程としての生産の過程が「統合され」、それらを「抽象的一面」として含むものとされているわけである。しかし、商品売買による商品価格差の実現という基本性格はむしろ商人資本的形式と産業資本的形式とに共通するものであり、金貸資本的形式が他の2形式から大区分されるべきであろう。 $G\cdots G'$ は、それら2形式の増殖活動それ自体に寄生する形式であって、他の資本家によって選択された資本家の活動を選択することが金貸資本的形式における主要な資本家の活動となるのである。そこでは、資本家の活動が二層化している点に独自性があるとみうるわけである。金貸資本的形式においては、資本家の活動が流通に対して間接化しているのであって、商人資本的形式、産業資本的形式に続いて展開されるべきであると思われるのである。

商人資本的形式は、流通世界に存在する価格の変動と相違を直接に利用して価格差を利潤として実現する、資金としての貨幣の流通へのもっとも直接的な投下と回収の形式である。

産業資本的形式は、より高く売れる商品をより安い生産費で生産することによって、流通世界における価格差を商品生産において利用する形式であって、異種商品間の価格差の創出は資本家の活動の過程として行なわれる。この形式にあっては、資本家の活動の過程の主要部分が使用価値の生産の過程であるから、価値の生産手段、商品としての固定性が増大することが、最大の特質となる

のである。

金貨資本的形式は、この2形式に資金としての貨幣を融通することによって、寄生的に流通における価値の増殖をはかろうとする形式である。この形式における資本家の活動の中心は、寄生される資本の資本家の活動を寄生する資本家が選択する活動である。流通の危険はこの資本形式にあっては間接化することができる。

〔9〕 本節での考察にもとづいて、「資本に対する資金という関係」（『五十年』下、1002ページ）について小括しよう。

われわれは、流通の拘束から解放された貨幣を貨幣所有者にとっての資金と規定し、資金としての貨幣の価値の確証、保蔵の手段としての流通における価値増殖行動の類型を、資本の諸形式として展開したのであった。資本として投下される貨幣は、流通において貨幣としての諸機能を免除されて貨幣所有者に保蔵された貨幣であった。この貨幣は、資本として投下されて資本の循環運動に充用されることによって、いいかえれば流通世界に触れることによって、商品経済的な一般的富として確証されることになる。このことを換言すれば、貨幣所有者によって流通の外部に引き上げられた貨幣は、資本の運動に参画することを通して資金として存在しうることになる。資本とは貨幣の資金としての存在のための価値の変態運動のことである。

流通から遊離された資金としての貨幣は、商品経済的富としては、流通とその外部との間の往還運動の中に存在するしかないのであった。こうして資金は資本としての存在態容を与えられる。あるいは資金は論理的に資本に転化される。先に引用したように大内力が「資金という概念にはすでに資本たるが含まれている」と述べていることは、このような資金と資本との関係を念頭において理解することができるであろう（注10）を参照）。

ところで一般に、資金とは資本の運動から遊休貨幣資本として遊離された貨幣のことをいうのであるが、遊休貨幣資本としての資金は、価値の増殖運動体としての資金の一般的な存在の仕方からさらに遊離された貨幣である。遊休貨幣資本としての資金は、流通から二重に外部性を付与された貨幣である。遊休貨幣資本としての資金の一般的考察は次章の課題である。（未完）